

続本朝往生伝の往生観

中 尾 正 己

各往生伝の往生観を把握しようとする場合、その編者自身の往生観、および編者の意志とは必ずしも関わらず各説話を通してある程度それ自体を示すであろう所の当時の社会各階層の往生観の一般的傾向、という少くとも二つの側面からの考察を行うことが必要である。今回は「続本朝往生伝」（以下「続往生伝」）を取り上げ、前者の立場から、編者大江匡房の往生観を検討することにした。

一般に往生伝撰述の主要な目的は、広く往生の事例を集め、そのことによつて往生の事実を確認することを通して、自他の信仰を高めるところにある（井上光貞「日本古代の国家と仏教」）と考えて大きな誤まりはないであろう。従つて、各往生伝中に豊富に見られる瑞相、異相、夢告など往生の明証と信じられた各種の記載は、往生伝中において極めて重要な意味を持つとしなければならない。

まずこの点に照らして「続往生伝」の記述振りを見ることがするが、その前に、本書の前後に編まれた二三の往生伝に

ついて見ておくことにしたい。かつて慶滋保胤撰「日本往生極楽記」（以下「極楽記」）について点検した結果（拙稿「日本往生極楽記の撰述について」印仏研究二五―一）、全四十二編中往生の証の明らかではないものは、兼明親王の夢告により後補されたという特殊な事情にあり、しかも菩薩としての崇敬を受けた太子と行基の二編のみに過ぎず、同書の序にも、「異相往生者」を集めたと自ら記す通り、「極楽記」の撰述に当つて、この点に極めて重きを置いたことは疑いのない所である。

一方三善為康撰の「拾遺往生伝」「後拾遺往生伝」の場合は、往生の証の必ずしも明かでないものも見受けられ（入道平円、沙門真能等）、中にはこの部分について為康によつて潤飾が施されたかと思われるものもあり（和氣真綱）、「極楽記」とは異なる面もあるが、為康撰の両書を通じて特に注目されるものに「夢告」がある。夢告の形で往生の予知、告知が得られたとするものの数は、「拾遺」では九四人中六三人、「後拾

遣」では七四人中五七人の多きに上つている。夢告を通しての往生の確証を得ることに為康が特殊な執着を抱いていたことは明かな所であろう（速水侑「浄土信仰論」）。

保胤・為康らが、以上の如く、ともに往生の事実を客観的に示すと考えられる事例の収集・記述に強い熱意を持つと思われるのに対して、「続往生伝」の場合はどうであろうか。源顕基伝を例にとると、臨終に関しては「癸背之病、（中略）万病之中正念不_レ違、不_レ過_二癰疽_一、不_レ如此次早_二婦_一九泉、便止_二療治_一、唯念仏長以入滅」とあり、その他の部分にも取り立てて往生の予知・告知に関する記載は見当らない。沙門寛印伝の場合も「最後臨終身心不_レ乱（中略）西向氣絶」とあるのみである。同様に積極的な往生の確証と見なされる記述の見当らないものとして、大江音人・範久・能円・安修など多くの例を挙げることが出来る。

そのほか、沙門助慶伝などの場合、一応「瑞相大多」と記すものの、その具体的記述はなんらなく、慈忍・増賀・源章任・願証・縁妙の各伝もこれに類する。

以上の例示ではば明らかである様に、匡房の場合、往生伝に収載すべき事例の収集、および採択決定の段階において、往生を遂げ得たことの客観的確証をそれが有するかどうかについてばさして意に介さず、むしろ一般に往生者とされていくものについてそのまゝ取入れたとの感が強いのである。従

つて、少くとも保胤や為康と比較する限り、彼等の強く執した往生の成否如何は、匡房においては必ずしも深刻に問われなければならない問題ではなかった、ということになる。

次に、往生の成因となるべき、いわゆる往生の行業に関する「続往生伝」の記述の仕方を見ることにしたい。一例として、先に触れた寛印伝を再び取り上げて見ると、華嚴經の偈の後半をとつさに書き継いだ学識や、人々に漁獵を戒めて池の魚をかき消した靈驗談などに筆のほとんどが費やされており、末尾の部分に懺悔、法華誦誦、念仏などが簡単に列挙されているという構成になっている。

これと同巧異曲の、奇談靈驗談の類が伝の中心的位置を占めるという例はほかにも多く（慈忍・増賀・観実・成尋など）、それだけ往生の主題が正面から追求されていると見られるものは限られたものになる。中には遍照伝の如く、靈驗的説話にほぼ終始するものすら少なくない（日円・大江定基など）。これら奇談靈驗談の中には、当然往生にまつわるものを見受けられる（範久・覚真・延慶など）が、それにしても、本書全編を通じてこれら奇談靈驗談の記述に相当な熱意のうかがわれる反面、往生の問題、特に往生の相とともにその中核をなすはずの往生の成因たる往生行如何に関しては、通り一遍の叙述を出ないとの印象を拭うことは出来ない。

この点について再び「極樂記」を参照するならば、同書に

においてはほとんどの伝に往生の行業の記載があり、それが同書撰述における素材選択の重要な基準をなしたと考えられる（前掲拙稿）ことを見ると、両往生伝の差異は相当大きいものとしなければならない。

更に先行文献からの引用の仕方を通して両書を比較するならば、「極楽記」の場合は先行文献の記事中から往生の行業および往生の証については忠実に抜き出して几帳面に記し、その他の事柄は比較的省略するなり、引用が確實でなかつたりする（前掲拙稿）のに対して、「続往生伝」では大分趣が異なる。すなわち、「新国史」から引用したと見られる遍照伝では天狗説話が詳細に紹介され、「三代実録」および「別伝」を下に敷く大江音人伝ではその博識ぶりに記述のウェイトが置かれており、更に源信伝に至つては、源信の往生の様子に関して「別伝」に詳らかなりとして詳説を省略するなど、匡房の関心が必ずしも狭い意味での往生の問題にとどまるのではなく、むしろ多方面への広がりを持つものであることが、ここでも注意されよう。

以上、「続往生伝」に関して、主に往生の証、およびその行業の記述振りを見て来たわけであるが、結局の所、これらの点について同書は必ずしも深刻な問題意識のもとに撰述されたものとは考え難いことを述べ来つたのである。しかしかように裁断を下すことはまだ早計に過ぎることであるかも知

れない。特に同書が「極楽記」のあとを襲ぐものとして対象時期を制約され、取材の範囲も比較的限制されていた（井上光貞「往生伝、法華験記」という事情を考えるならば、匡房の望む事例が必ずしも十分には得られなかつたということもなかつたとはいえないであろう。更には、彼の社会的環境、地位、編纂当時の心境など、より広い観点からの考察を行うことが必要であることも言うまでもない。しかし、ここでは更に「続往生伝」そのものを掘り下げることを通して、右に得られた一応の結果についての裏付けを求めることにしたい。

その材料の一つとして、いわゆる悪人往生説話がある。殺生をこととした武将でありながら往生を果したという源頼義伝の末尾に、「定知、十惡五逆猶被許^二迎接^一、何況其^レ余乎、見^三此^一一兩^一（他の一は但馬守源章任伝）、太可^レ懸^レ待^一」という彼自身の感想がある。極重悪人の迎接を受け得たことを自らの往生の頼りとするということが、彼の場合自らの信仰をより高めることを求め、道徳心を練磨する方向にはつながて来ない。

同系統の源章任伝の場合も、慳食を極めた章任が迎接を受けたことで、同じ受領として大同小異のことがあつたはずの匡房は、ここでも自らの行為を悔恨を以て自省するよりは、むしろそのまゝそれを肯定することで自足しようとするのである（「古今著聞集」巻三の積荷船の説話参照）。

以上の二つの悪人往生説話を通して、匡房の往生観には往生への比較的安易な思いと、罪業感の欠除とが、その特質として見出されるように思われる。

先に出た章任伝の末尾には「往生不_ニ必依_ニ今生業_一、謂_ニ宿善_一」との彼自身の評言が付されている。これは章任の「今生業」を一面批判するものであると同時に、しかしながら多少の今生における罪惡よりも「宿善」に重きを置こうとするものであつて、彼の往生観の安易さの淵源の一つがここに求められよう。

本書冒頭の一条天皇伝にも「依_ニ十善之業_一、感_ニ大乘之位_一、往昔事_ニ五百之仏_一、今生少_ニ霜露之罪_一」とあり、続く後三条天皇伝においても、極樂に高い階位を得ることを自明のものとする前提に立つている。

すなわち、現世の果報、特に身分階の高貴が宿善の然らしむる所とする確信の存する限り、そして章任伝に見たように宿善が些少の今生業以上に浄土往生において決定的な意味を持つものとされる限り、文人として異例の昇進をとげ、公卿にも列した匡房にとつて、「宿業」は「宿善」としてより強く意識され、深刻な罪惡感に従つて望むべくもないのである。

今一つ臨終念仏の問題がある。比較的往生行を等閑に付す「続往生伝」において、念仏に限らず臨終時の行業がほぼ各

伝にわたつて丹念に記されていることは一つ注目に値いしより。極端な例に、一条・後三条両天皇の場合があり、ともに終始ごく一般的な伝記ののち、最後の部分に臨終の行業だけを殊更に書き加えるという形になつている（大江音人、桓舜もこれに類する）。

かくして、宿善に加えて臨終の行業が往生を得る要因として匡房によつて強く意識されていたことが考えられるのであり、臨終念仏は「尋常之積功」（起請八箇条）によるものとして、専ら日常不断の念仏行を重んじた求道的な保胤とは、この点においても対照的であると言えよう。

以上「続往生伝」における二三の問題を考えることを通して、彼の往生観には、当時の貴族の一人として浄土往生への関心の浅からぬものがあつたとしても、そこに樂觀的な安易さともいふべき特質の認められることを指摘した。先に見た本書における往生の証および行業に対する必ずしも強い問題意識を伴わない記述振りの、これはよつて来たるゆえんの一つと考えられるのである。この匡房の信仰のあり方は、院政初期貴族階層の信仰の一面を表わすものであるが、例えば数量念仏や善根主義が当時大いに盛行しつつあつたことを考えるならば、匡房の往生観が当時の一般的信仰の中において持つ意味合いについては更に検討する必要がある。（未完）